

人外オチモノアンソロジー

# もしそば





# 清く正しく爺さまと

楠 瑞稀

働けど働けど我が暮らし楽にならざり、と言ったのは誰だったか。

じっと手を見ても天井を仰いでも金が降ってくるでもなし。餓えて路頭に迷いたくなければ、がむしゃらになって働くしかない。

「くはああ、疲れたああ……」

今日もくたくたになるまで働いた私は、深夜遅くになってようやく自宅に帰ることができた。毎日毎日一生懸命働いているのに、なんでこんなに生活が苦しいのか本当に不思議で仕方がない。

夜中の二時までやっているスーパーで買ってきた、賞味期限ぎりぎりの値引き惣菜をテーブルの上に投げ捨てるように置いて、私は床に突っ伏す。今日という今日は本当にくたび果れて、身体を起こす気力もない。

「ああ、なんでこんなに貧乏なのよっ」

そしていつものようにそのままごろんと寝転がり身体を横にする。けれど思い掛けもしないことに私は、そこでしっかりと視線があってしまったのだ。

ベッドの下にいた、見知らぬ誰かと。

「だっ、誰だ貴様あああああっ!!」

「しまった! 見つかった!」

ゴキブリのような動きで素早くベッドの下から這い出してき

た相手を、身を起こした勢いでタックルをかけ床に押しつぶす。そのまま腕を取り背面に捻り上げた。

「人のベッドの下に隠れるとは不逞え野郎だ。泥棒か! 強盗か! ただでさえ金に困っている私んちから物を盗っていこうというその根性、絶対に許すまじっ!! ちくしょう、貧乏で悪かったな。どうせ盗っていくものなんて何も無いよ! 黄泉路で後悔させてやるっ」

「ギブギブギブっ!! いたいけな老人に遠慮もクツもない奴じゃな。てか、八つ当たりだろ、それ、ちょ、ごめんなさいっ! 謝るから、謝るからとにかく放して! 痛い痛い痛いっ!」

「うるさいっ、黙れ! いい年した大人がびいびい喚くな!」

人間本気で驚くと、思考も疲れも吹っ飛ぶものらしい。そう言えば泥棒じゃなくて殺人鬼がベッドの下に隠れているとかいう都市伝説もあったよな、と私が思い出したのは関節を極められているのと逆の腕で床を必死に叩いていた小柄な老人が、疲れ果てて青息吐息になり始めた頃だった。

「で、あなたはいったい誰なのよ?」

テーブルの対面に座った相手を私は睨みつける。とりあえず逃げられないように、玄関は私の背後になるように座ってみた。

見た感じ、相手はただの貧相な爺さまだ。薄汚れた灰色の綿

パンに、黄ばんだような色のシャツに、袖口のほつれたラクダ色のカーディガン。ホームレスとまでは言わないけれど、それに匹敵するくらい粗末な身なりにやつしている。いや、最近のホームレスはそれなりにいい暮らしをしているとも聞くから、意外と宿無し無職の路上生活者でも不思議はないかもしれない。

すっかり戸締りをしていたつもりだったけれど、もしやどこか鍵を閉め忘れた窓から、ねぐらを確保するつもりで入ってきたのかも。ううむ、無用心だったか。

「誰かも分からずに関節極めるとは乱暴な娘っこだな。と言うか、年長者にお茶ぐらい出せないのか。お茶」

目の前の爺さまはすっかりくつろいだ様子であぐらをかき、ひじを着いてふてぶてしい態度でこちらを見ている。私にはっこりと慈悲の気持ちを込めた表情で微笑みかけた。

「年長者だからって無条件で優遇してもらえと思うなよ。頭から熱湯ぶっかけられ、鼻の穴から茶葉つっこまれないか」

口調が荒いが、こちとら仕事を終えて帰ってきたばかりで疲れているのだ。しかも相手は不法侵入の爺さま。騒ぎを起こしてアパートを追い出されたら困るから、警察を呼んでないだけで、お客様扱いをするつもりは欠片もない。まあ、お湯を沸かすガス代も茶葉代も勿体無いから、わざわざそんなことはないけど。

私が丁寧拒否の気持ちを伝えると、爺さまは慌てて姿勢を

正す。うん、やはり人間いくつになっても素直なのが一番だ。

「で、繰り返すけどあなた誰？」

「うむ、では素直に答えるがな。ワシは福の神なのじゃ。しばらく前からお前さんの家に居候させてもらっておる」

「嘘だっ!!」

「うっ、なななな何故わかつ、何故そう思う！」

「福の神なんかうちでいたら私はもっと裕福だからだよ！しかもいくらなんでも動揺しすぎだろっ」

ひたすらどもりながら挙動不審にあたふたする爺さまに、びしっと指を突きつける私。てか、そんな景気の悪そうな顔をした福の神がいたらがっかりだよ。心の底からがっかりだよ。

「くっ、即座に真実を見破るとはっ！ お主、なかなかやりおるな」

いやいや、そんなところで認められてもちっとも嬉しくないから。むしろ、誰だって本能で分かるレベルの問題でしょうが。

「で、こんどこそ真面目に答えてよね。あなたは誰？」

「うむ。聞いて驚くなよ。ワシは貧乏神じゃ」

爺さまは猫背の背をびんと伸ばして、意気揚々と答える。私は眉間に皺を寄せた。

「はあ？」

「かあっ、疑っておるな。まったく最近の若者は『科学万能主義』にかぶれおって、現実しか見ようとせん。そうやって遊び

# 夢は天蓋の

中井かづき

ええもん見せたる、と呼び出された桃子は、高遠が抱いている子犬を見て歓声をあげた。

「パールっていうねん。おれが拾ったんや。スピッツやで」

「捨て犬なん？ 真っ白やし、めっちゃ綺麗やなあ」

桃子はうっとりとしてパールを撫でた。まだ首輪をしていない犬は、おとなしくされるがままになっている。

桃子の家でもスピッツなら飼えるのに、きっと両親はだめだと言うだろう。それに比べ、高遠の祖父母はとても優しい。パールが家族の一員となることに、嫌な顔はするまい。

「ええなあ、高遠んところは」

「……桃子かて、いつでも見に来たらええやん。散歩も一緒に行けるやんか」

約束やで、と小指を絡ませると、どこからか笑い声が聞こえた。見れば、スピッツが——パールが、笑っている。

身を固くする桃子と高遠の前で、白い光が舞った。高遠の腕の中にいた子犬が、帯のようにするりと解ける。

「えっ!？」

桜吹雪のようにも見えたそれは、白く長い髪。頭上に、小さな耳が尖っている。白い肌、風にはためく白いワンピース。

桃子が見たこともないほど、綺麗な女の人だった。

「……パール、なん？ 変身できんの？」

女は高遠の唇に人差し指を当てて、綿菓子のように微笑む。

太陽がひとつ増えたみたいや、と桃子はぼんやりと思った。

「私はね、本当は、犬じゃなくて……宇宙人なんです」

秘密ですよ、と女は目を細めた。

スピッツと女性の姿に変身できる宇宙人、パールと出会った幼い日を懐かしく思うほど、桃子は成長した。背も、手足も伸びた。宇宙について詳しくなったし、高次方程式も解けるようになった。桃子は、理系クラスにいる数少ない女子のひとりだ。

パールとの出会いが桃子の興味の方向を決定した。宇宙のことを知れば知るほど、既知の世界の狭さを、だからこそその大きさを知る。新たな発見が、さらなる謎と胸をときめかせる夢を紡ぐ。

宇宙に関わる仕事がしたい。幼心に抱いた漠然とした思いは、今も変わらない。

変わったのは、高遠との関係だ。学年が上がるにつれて会話が減り、話す機会が減り、今では廊下ですれ違っても挨拶さえしない。彼の姿が目に入るだけで、眉間に皺が寄った。

高遠とは断絶状態が続いていても、学校の行き帰りに出会う高遠の祖母とは、今も何の屈託もなく接することができた。

「こんにちは、おばあちゃん」

パールと並んでコスモスのプランターを眺める小さな背中に

声をかける。

「ちょっとだけ、パール散歩させてきてええ？」

「ほな、桃子ちゃんにお願いしよかなあ。ばあちゃんはここにおるからな、早よ戻っておいでや」

パールに散歩など必要ないのだろうが、彼女はリードにつながられることも、散歩することも苦には思っていないようだ。人目がなくなると、親しげに声をかけてくる。

「調子はどうですか？ 週末も模試なんですよってね」

「うーん、まあまあやな。大学入って好きな勉強するために、今は頑張らなあかんから。……な、高遠はどない？ 万事抜かりなさそうやけど」

抜かりないですね、とパールは笑う。

「桃子さんも毎日遅くまで勉強してらっしゃるんでしょう？」

桃子さんが頑張り屋さんなのは、私がよく知っています」

それ以上に努力するやつがいるから、成績優秀者の最上段に

桃子の名前が一度も載らないのだ。口の中が苦い。

枯れくたびれた内心を表に出さぬよう、桃子は無理に笑った。

「そうやね、すごい宇宙機作って、故郷まで乗っけてあげるって、約束やもんね」

「ええ、楽しみに待ってますからね、桃子さん！」

「でも、パールはお国から逃げてきたんやろ？ 親の決めた結婚が嫌で家出してきたって言うてたやん。帰ることになっても

ええの？」

パールが地球にやってきた事情というのは、なかなか複雑らしいのだが、子どもだった桃子や高遠が理解できるように翻訳した結果、「親の決めた結婚が嫌で」となったようだ。

パールが宇宙人で、太陽系の外からやって来たこと知って胸躍らせた桃子だが、ワープ航法というものがまったくのフィクションで、それどころか、人間を乗せて宇宙を旅するような、いわゆる宇宙船さえ存在しないと知ったときの落胆は大きかった。

しかし実際に、パールは地球にやって来たし、大した不自由もなくコミュニケーションが成立している。彼女らの科学技術は地球よりもはるかに高い水準にあるのだ。

充分に発達した科学技術は、魔法と見分けがつかない。そんな言葉を思い出した。

「達成が難しいからこそ、帰ることを前向きに考えられるんですよ」

「そんなもんかなあ」

パールの母星はいったいどこに、どのくらい離れたところにあるのか、パールは何も語らない。

太陽系から最も近い恒星、ケンタウルス座のプロキシマ・ケンタウリでさえ、その距離は、四、二光年——光の速さで、四年。未だ光の速さに到達していない人類は、人生を何度繰り返せばパールの星まで届くのだろう。

すごいエンジンを作る、すごい宇宙機を作る、口にするのは簡単な、星を眺めるのが簡単なように。

けれど、はるかな高みへ至る階段は長く険しく、桃子は空の果てを目指す意味を見失いかけていた。

マンションの裏手に設けられたささやかな公園に、見慣れない黒づくめの男がいた。男の頭には猫耳状の三角形が乗っており、尻からは尻尾にしか見えぬ紐が生えている。彼はベンチの前で、何かを探すようにうろろくと歩き回っていた。

桃子は公園の入口から男を見つめる。

(コスプレさんか、それとも……)

どちらにせよ、関わらない方がいい。迂回しようとしたまさにその時、男が振り返って桃子を見た。

意外に若い。大学生くらいだろうか。黒い前髪の下で黄緑色の眼が瞬き、桃子はぎょっとして数歩下がる。

男は耳と尻尾を揺らし、人懐っこい笑みを浮かべた。

「こんにちは、いいお天気ですね。ところで……」

勧誘か、アンケートか。警戒メーターの数値が上がる。

「宇宙人って、存在していると思いますか？」

針が振り切れた。

逃げた方がええ。知らん顔をするんや。頭の中で警報が鳴り

響くが、体は逃げ出すことをためらった。男の耳と尻尾、それに宇宙人という言葉がパールを連想させるのだ。

「……思います。あたしにも宇宙人やし」

どうにか絞り出した桃子の固い声にも男は怯まず、それどころか、より笑みを深めて頷いた。

「その通りです。僕は宇宙人です」

「……はい？」

大きく一步、桃子は下がる。逃げるあたし、アブダクションされたらどないするねん……いや違う、そうやない。

この男は、パールと関係があるのか、それとも。

躊躇した隙に、男が桃子の腕を掴んだ。制服のブラウス越しにも、男の手のひらの異常な熱さが伝わってくる。

「脈拍と体温、発汗量をモニタしています。正直に教えてください。あなたは、僕のほかに宇宙人だと名乗る者を知っていますか」

「……知らん」

テレビや映画で見た宇宙人たちの姿を思い浮かべて答えるも、猫耳男の手は緩まなかった。

「ご存知なんです。その宇宙人のところへ案内していただけますか？」

咄嗟に桃子が思ったのは、猫耳男はパールの追っ手なのではないかということだった。それでもなければ、パールとは無関

# 鴉天狗の養い子

篠崎伊織

白くくもる吐息と、高くつもった道端の雪に、ずいぶん遠くへ来てしまったなど、少女は一度だけゆっくりと瞬いた。

「こちらよ、紗夜さん」

車から手際よく紗夜の荷物を取り出した真穂子が、右手にそびえる門、その手前に伸びる石段を示す。彼女はそのまま紗夜の旅行鞆を持ったまま、階段を上り始めた。紗夜も慌てて手荷物をかかえ、「はい」と、従姉の後を追う。

峯沢村は、東北の山奥深くに位置する、小規模な集落だった。

この村の出身だった父が事故で亡くなり、後妻である継母と、腹違いの弟妹と共に紗夜が遺されたのは、中学校の正月休みも開けて間もない頃。

血の繋がりのない継母たちと紗夜は父の生前から、あまり親密ではなかった。だからたった一人家族と呼べた父の死に、紗夜は激しく打ちのめされた。

けれど、その父の遺言状が、彼女に転機をもたらした。

自分が死んだら故郷の親族に知らせてほしいこと。同郷だった亡き先妻との間の子である紗夜については、故郷に住まう先妻の母親——彼女にとつての祖母に、養育の全権を任せること。

そう記された書状により、紗夜は今ここにいます。

父は継母と再婚する際に駆け落ち同然で、幼かった紗夜を連れて家を出ていた。そのため彼女は今まで、父親の親族というものに会ったことが無かった。だから父がそんな遺言を残して

いたことには驚いたし、遺言の通りに父の故郷——ここ、峯沢村へ連絡が取られた結果、父方の従姉だという真穂子をはじめとした数人の親類縁者が現れたことは、嬉しいことだった。

なにせ継母たちとの生活は、幸せだとは言えなかったのだ。それに紗夜も祖母と、自分の血縁たちと会ってみたかった。遠くとも、峯沢村へ行く理由なんてそれだけで十分だと思えた。

十数段ばかりの石段をのぼりきると、門の奥に石畳が続いていた。石畳の向こう、玄関前には和服の老婦人が立っている。

「佐和子おばあさま」

真穂子が少し驚いたように名を呼んだ。佐和子。話に聞いていた、祖母の名前だった。紗夜が緊張しながら軽く頭を下げると、老婦人は「お帰りなさい」と口元をほころばせた。

「宮代の家へ、よく帰ってきてくれました。あなたが紗夜ね」

「はじめまして。あの、よろしく、お願いします」

佐和子は緊張しきっている紗夜に微笑むと、「そうかしこまらなくていいのよ」と優しく言った。

「あなたはこの家の娘なのですもの。肩の力をお抜きなさい」

紗夜がそっと頷くと、佐和子もにっこりと笑む。よく笑う人だなと、紗夜は思った。

「それにしても、佐和子おばあさま。いつからここにいらっしゃったのですか。まだ外は寒いのに」

「大丈夫よ。車の音が聞こえて、慌てて出てきたの」

確かに、二月の初めにしては随分と寒い。土地柄だろうか。

紗夜も着込んでいたが、先ほどまでは暖房のきいた車中に居たのだ。真穂子が佐和子に「でも、外套も羽織らないで」と心配そうに言っている横で、うっかりくしゃみをしてしまった。

その直後だった。うしろからふわりと、紗夜の肩に羽織がかけられたのは。

「佐和子、真穂子。総領娘が風邪をひいてしまうよ」

いつ、紗夜のそばに来たのだろう。傍らから青年の声がした。

「あら、まあ。おじいさま」

驚いたように言う佐和子の声が、紗夜の耳元を通り過ぎる。

音は拾ったが、理解する余裕が無かった。いつの間にかそばに立っていた青年を見上げた少女は、ゆっくりと目を腫らせた。

「お久しぶりです。でも、彼女とは御前参りにて会うとばかり」

紗夜よりも幾つか、きつと三、四ほど年上か。十七か八前後の年若い青年が、そこに立っていた。髪は紗夜たちと同じ黒、

けれど瞳は空の青色。和服をまとった彼の背には、人ならぬ証が大きく広がっていた。薄い灰色の、身の丈ほどもある翼。

「ああ、まあ。でも、早々と会っても、それでもいいだろう」

真穂子の問いに、異形の青年が答える。紗夜は瞠目したまま、じっと青年を見た。どうしてか目が、逸らせなかった。

「な……んで、羽」

彼の背の翼は、作り物には到底見えなかった。でも、おかし

い。翼をもつ人なんて、居るはずが無いのに。

ぼつりと彼女が言葉を取り落したことで、紗夜の様子に気づいたのか、佐和子が「紗夜、この方は」と、丁寧に紹介した。

「昔から、村を守ってくださっている守り神様ですよ。そして、私たち宮林家のご先祖にあたります。理乃、とおっしゃるの」

異形は——理乃は「正確には、おまえの先祖にあたる夫婦の養い子だよ」と紗夜に言った。

「あら、でもわたくしのひいおばあさまも、おじいさまもおばあさまも、皆あなたに養われたと聞いておりますのに」

苦笑しながら佐和子が付け足す。真穂子が「この者は皆、鴉様に育てられたようなものでしょう」とさらに付け加えた。

なんなのだ。どういう、ことなのだ。紗夜が助けを乞うように、やつのことで視線をそらして真穂子を見れば、彼女は

「理乃様は、鴉様は、この村の生き神様なのよ」と微笑んだ。

——およそ百五十年前、なかなか子を授からなかった峯沢神社の神主夫妻へ山神によって使わされた、鴉天狗の子。それが理乃であると、真穂子は紗夜に説明した。夫妻は後に人間の子供たちも授かり、その一人が宮林家の、つまりは紗夜と佐和子の先祖にあたるのだそうだ。しかし神主夫妻の寿命は、長くはなかった。そこで、理乃が早世した養父母に代わり弟妹たちを育て、またその孫子や村人の子供たちもその手で世話したのだという。何代も、何代も。そうして百年以上、この村を守っ

ているのだと、真穂子は誇らしげに語った。

「鴉様は宮代家の離れにお住まいだから、こうなった以上、紗夜さんも会う機会が多いのではないかしら」

最後にそう締めくくる。冗談ではなかった。紗夜には、理乃が百年以上生きているだなんてこと、信じられなかった。何より、守り神だ生き神だと言われても、紗夜には彼が異形の者にしか思えない。ざわりと時折風にごめく翼だって、面妖なモノと目に映る。でも——そこに翼があるのは、現実だった。

「そんな……」

「まあ、突然に信じろと言っても、難しい事ではあるだろう」隣で、理乃が困ったように言った。

「でもこの村で生きる以上は、慣れてもらわねば困るけれどね。特に、おまえは今となっては宮代の跡取り娘であるのだし」

いいかい、と彼は続ける。

「この村は、外とは違うところがある。けれど、すべては言ってみれば鏡に他ならないから。——『刃傷をするな、他人の家を燃やすな、盗人をするな、村の神を外へ晒すな』。昔からの、この村の掟だ。これだけは、守っておくれ」

それだけ紗夜を見下ろして告げると、「それではね」と言い残し、異形は旧家の奥の方へ、庭伝いに去って行った。

真穂子と佐和子は、その後ろ姿へ軽く会釈するように頭を下げる。紗夜は呆然と、ただそれを見ていた。

自分は遠くに来たどころか……いったい、どこへ来てしまったというのだろう。その言葉だけが紗夜の頭にぼつりと浮かぶ。

「いいですか、紗夜。おじいさま——理乃のことは、絶対に村の外の者には、伝えてはなりませんからね」

鴉天狗を見送った佐和子が、固い声で紗夜に言った。

紗夜がなんとか「はい」とだけ口にする、と、「よろしい」と言って、佐和子はがらりと支閤の戸を開ける。「お入りなさい」との声に従って、紗夜は真穂子に促され、宮代家の戸をくぐった。

この村は、幼い頃に父に連れられて離れたが、紗夜の生まれ故郷だと聞かされた。

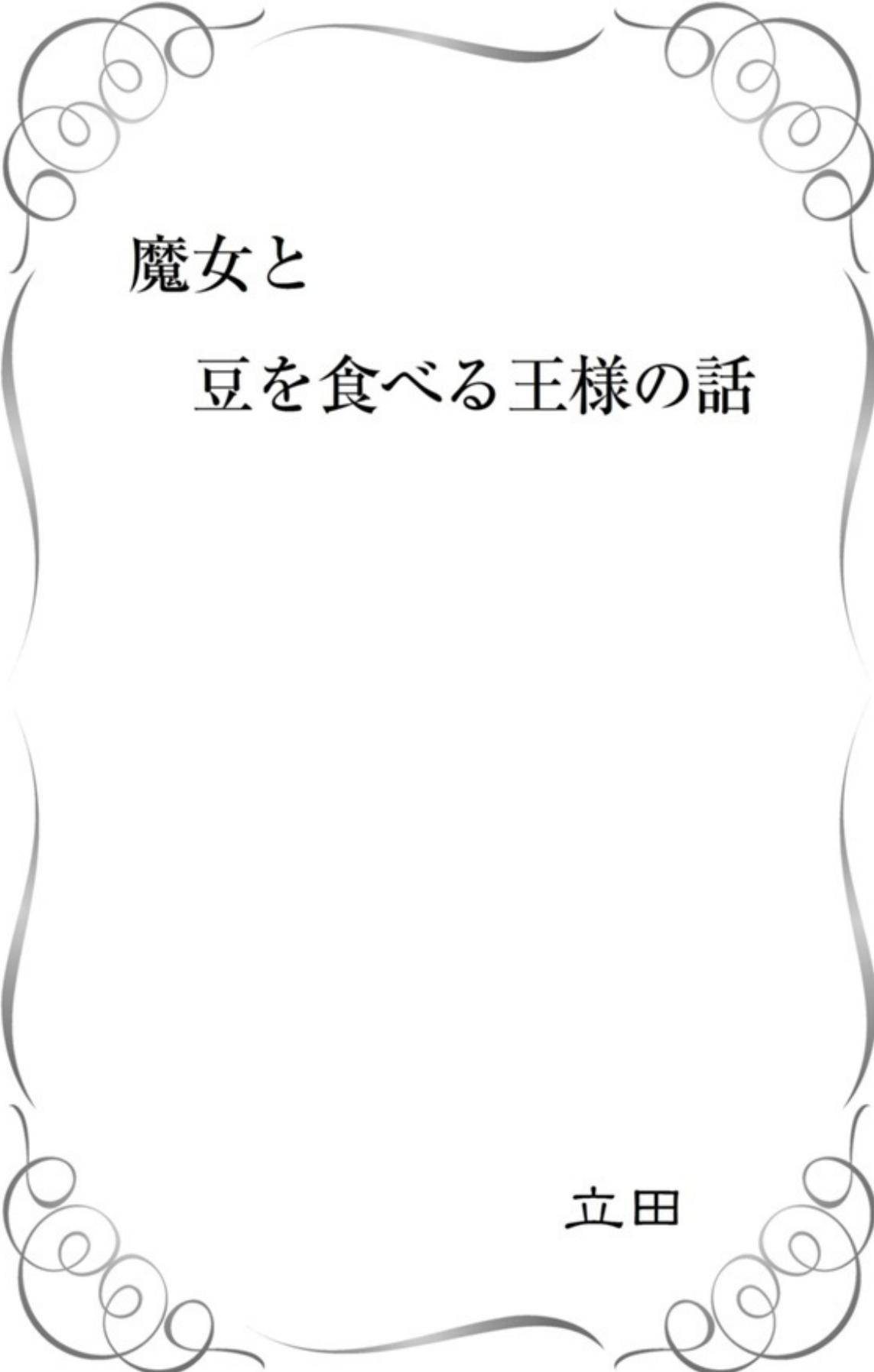
でも、それでも、有翼の人間など——そんな異形がいるなんて。そんな場所が生まれ故郷だなんて。

ただ、その歪いびつさが恐ろしい、と。

まだ納得しきれない混乱の中、紗夜は肩へとかけられた羽織の端を、力の入らない指でそっと握った。

夢ならいいのに。紗夜は村に来て以来、そう思いながら眠りについていて。でもこの現実、どうやら夢ではないらしい。

「おはよう、総領娘」



魔女と  
豆を食べる王様の話

立田

俺は、数年前から、爪が伸びていない。

異変はもう少し前から起こっていたのかもしれないが、当時付き合っていた女に背中に酷い爪痕を残された、その翌朝まで俺はそれを認識していなかった。しきりに申し訳なかつた彼女に爪切りを貸してくれるように頼まれて、そのときやっと俺は自分の家に爪切りがないのは俺が爪をまったく切っていないからだと気づいたので。

実は伸びていないのは爪だけではない。髪も髭もその後伸びるのをやめた。普通は死んだ後でも伸びると聞かすが、鏡の中から見返す俺の顔はいつも同じ髪型だ。ついには髭剃りを旅行の際に持参するのもやめた。

荷物も手間も減ったのは楽だが、たまに浮かんでくる単語がある。『不老』。そんな馬鹿なと俺は笑い飛ばすと同時に、この状態が今後も続くのであれば数年後には問題になるなとも冷静に考えていた。

今はいい。外国を飛び回る仕事のせいで周囲には感づかれていないし、久しぶりに会った知人に変わらないうちでも言われたら気楽な生活のせいだと誤魔化せる範囲内だ。しかし、将来的には俺のこの異常性は呪いとなる。さてそのときどうするか。

これから俺が話すのは、この問題の解決策であり、かつ元凶でもあった魔女に出会ったことだ。

のっけから尾籠びんろうな話で恐縮だが、俺はそのとき盛大な下痢に悩まされていた。

異国で食あたりをしたことのある人なら納得してくれるだろうが、まるで腹の中で怪物どもが大戦争を起こしているような七転八倒の苦しみだった。常備していた正露丸もまったく役に立たず、俺は悪寒に震えながら夜じゅうホテルのベッドとトイレを往復する羽目に陥った。

少し足腰が立つようになると、俺はタクシー代を奮発し中華街へと向かった。

外国で体調を崩すと、俺は漢方に頼ることが多い。その国の言葉が喋れない場合、現地の医者にパントマイムをするより漢字を書く方が症状が伝わるし、さすが中国四千年の歴史と云うべきか漢方薬はどの国で処方されても一定の効き目があるという経験則からだ。東洋医学ということで、東洋人の俺の体質に合っているのかもしれない。

そんなわけで、俺は腹を押さえながら瓦屋根の四隅がびんとはねた赤い門をよろよろとくぐった。家鴨かひよの丸焼きが幾つも刺さった串やら肉饅頭を蒸す湯気の横を通り抜け、少し静かな脇道に逸れる。すると、ホルマリン漬の標本のごとく高麗人參を浮かべた大小さまざまなガラス器が陳列された店の扉に、なんと日本語で「只今の時間、医者『います』」と書いてある看板

が掛けてあるのが目に飛び込んできた。

俺は信じられない幸運に腹の痛みも忘れて看板をまじまじと眺めてしまった。間違いなく懐かしい母国語ではあったが、どことなくつたない文章や、ひらがなが妙にカクカクしているところを見ると、生粋の日本人が書いたわけではないようだ。それでも日本語というだけで素晴らしい。「います」の部分だけ看板にくりぬかれた穴を通して読むようになっていて、医者が不在のときは、裏から札をひっくり返すか、別の札に差し替えたりするのだろうかと思った。

医者がいないのに看板がそのままになっていたなんてことがないことを心底祈りつつ、俺は脂汗で濡れた手で店の扉を開けた。扉に付けられた鈴が、——リンと鳴った。

薄暗い店内には海産物やら茸きのこやらの得体の知れない匂いが充満していたが、それを商う者は誰もいなかった。俺はところせましと並べられた段ボール箱の間をのろのろと縫って、光の射してくる方へと向かった。問口の割にやけに奥行きがある。あと少しでも歩くならどれだけ床が汚かろうが一回顔面から倒れ込むぜ、と本能が理性に宣言したそのとき、俺の体は白衣に包まれた腕に支えられた。

表の店とはうってかわって白く清潔な診察室に通され、スツールに座らされながら、俺は阿呆なことを考えていた。看護婦が白衣の天使なら、女医は白衣の女神とでも呼べばいいのかとか

そういうことだ。天使であれば若くなきやいけない気がするが、女神の年齢に上限はない気がするし。まあつまり、俺の救いの女神は、太古の神というか、幅広い年齢層の中でも極めて上限に近いところにいる人だったのだ。

彼女は俺の症状を聞きだすと、口の中を覗きこんだり脇の下に挟ませていた体温計の目盛りを読んだりしてから尋ねた。

「豆を食べませんでしたか？」

そういえば、昨日出された料理に豆の煮込みがあった気がする。俺がそう伝えると、女医は頷うなづいた。

「この国の人はよく食べるのですが、外国人であなたのような症状になる人が多いです。だいじょぶ、すぐ治ります」

さらさらとペンが紙の上を滑る音で狭い部屋が満ちた。

どうやら日本人ではないという俺の考えは当たっていたらしく、女医の日本語には耳慣れないアクセントがあった。それでも医者として過不足ないほど流暢に喋る。

異国での心細さもあったし、異国だからこそその油断もあったのだろう。俺はそこでつい口にした。

「私は数年間爪が伸びていないのですが、これは病気ですか」

「爪だけではなく、髪もでしょう」

カルテから顔を上げずに女医が言った。

「そして髭も。何回切っても、いくら剃っても、翌朝にはもう元通りになっている」

俺は、目の前の白髪をすっきりとまとめあげた横顔を見つめた。

「どうして」

「それを知っているのか？ 私が貴方のその呪いの元凶だからですよ、王様」

年老いた女医は俺を妙な名で呼んだ。いつのまにか訛りが消えていた。俺の腹痛も、一本向こうの通りの喧騒も、消えていることに今頃気づいた。俺は怪しい老婆を見返した。

「警戒する必要はありませんよ。私の話を聞けば貴方は思い出すでしょう。そうすれば、私の来訪を感謝こそすれ、恨むことはないはずですから」

俺は数回呼吸する間に温度のない微笑を浮かべる老婆を観察し、握りこんでいた拳から力を抜いた。自分では落ち着いていると思えたが、呆然としていたのかもしれない。

「どうということだ」

「私は貴方を軌<sup>くわ</sup>から解放しに来たのです」

老婆の表情と口調は静かで、直ちに俺に危害を加える様子ではなかった。冗談や嘘を言っている気配もない。精神の均衡を崩しているのかと思ったが、そうではないと俺の勘が告げていた。その方が厄介なのかそうでないかは分からなかったが、間違いないのは、老婆の話が俺の興味を惹いたということだった。

「聞かせてもらおうか」

俺は目を細めると、座り心地の悪いスツールに座り直した。

むかしむかし、あるところに王様がいました。

王様というからには国を治めていたのですが、残念なことに王様の国は小さな国でした。王様がまだ幼かったころ、ある人相見が王様の顔を見るなり「欲しいものはすべて手に入れるだろう」と告げたのですが、すこやかに成長され、なにごとにも人の何倍も上手にやりこなせるようになった王様がどんなに頭と体を働かせても王様の国は小さいままでした。それほどに弱く貧しい王国だったのです。

そんなわけで王様は色々なことをすべて自分でやらなくてはなりませんでした。

ある日、王様は数人の家来を連れて森を通りかかりました。鬱蒼<sup>うっそう</sup>とした森は王様の小さい国の大部分を占めるほど深く、旅人だけではなく近隣の住民もひとたび迷えば戻ってこられないのでした。ただし、国境である険しい山脈と、そこに広がるこの森のおかげで、王様の国はかろうじて守られてきたのです。

隣国での用事が手間取ったせいもあり、王様が帰途についたころには日が暮れてしまっていました。それでも、いつもであれば道をよく知っている馬に導かれて、王様は無事に城へと帰りついたことでしょう。しかしその夜は、王様の馬の足元に、

# 手のなかのポラリス

だも

天川めぐりのやることは、すべて、おれを試しているような気がしてならない。否定されている、と感じることすらあるくらいだ。

しかし攻撃的なわけでは決してなく、すくなくとも表面上はおとなしい。学校の休み時間などにすれ違って、わからないくらいに目立たない。まるで、水面を揺らすことなく潜水しているかのように、静かだ。

アーモンド型の比較的大きな瞳や、薄い唇から発せられる言葉、よく陽に焼けた長い腕など、人間であれば雄弁であろう箇所は、いつも黙している。

彼女が発する訴えは、水の中でしか感じられない。そして一緒に泳いでいるとき、おれは手足の自由を奪われたようになってしまう。

## \*

「一位、天川、二位、大洋！」

あー、ちくしょう！

また、負けた。

呼吸が乱れているので、舌打ちすらできない。隣のコースではゴーグルを外した天川が、プールサイドでストップウォッチを確認している諸星を見上げている。

その表情にはどこか喜びが混じっているような気がしたが、おれと目が合うときさっと口を閉ざしてうつむいてしまった。なんだよ、おれの前じゃ喜べないってのか。

「これで、全種目終了だな。二人とも、去年より伸びてるよ」水泳部顧問の諸星は嬉しそうに言う。

まあ、これは当然。身長が十センチも伸びたんだから、タイムも良くなってないと嘘だ。

「……今日はもう終わりだな」

なにげなくつぶやいたつもりが、投げ捨てたようになってしまった。

おれはそのことで、更に胸の中を悪くする。取り繕う気分にもなれず、逃げるようにして水から上がってタオルを取り、シャワーを浴びて更衣室へ行った。

まだ六月の中旬。

梅雨の合間を縫ってのプール開きで、水温も低い。普通の公立中学だから、温水なんてものはないし、去年の夏に先輩たちが引退してからというもの、部員はおれと天川の二人だけ。二年だから、今年が最後という緊張感もない。

けれど、気楽ではなかった。

「あ、大洋くん……」

着替え終わって更衣室から出たとき、まだ水着姿の天川が立っていた。女子更衣室に入るところなんだろう。

「あの、鍵、返しておこうか。ついでだし」

水泳キャップを外した天川は、背中までの髪を、ひとつにまとめて右胸に垂らしていた。ふくらみに張り付いた髪から水が滴り、足の指先を濡らしている。

そこまで迎って、おれは、はっと顔を上げた。

「じゃ、よろしく」

男子更衣室の鍵を放り、天川が慌てて手を伸ばす仕草を見届けることなくすり抜ける。

思い切り唇を噛んだ。

近くの階段を駆け上がり、そのままの速度で新校舎の屋上へと飛び出す。

くっそ、むかつく。

水の中で大胆な泳ぎを見せる天川は、陸の上ではまるで別人のようにおとなしい。

あんな、水の抵抗を易々と受けそうな身体をしているのに。

身長だって、おれのほうが高いのに！ どうして、勝てないんだろう？ 夏休み前に行われる水泳大会のことを思うと、気が気ではない。種目のひとつであるクラス対抗リレーは、絶対、おれと天川のクラスの一騎打ちだし、つまりそれは、アンカーであるおれたち二人の一騎打ちということになる。

女子にアンカーを任せるクラスもかっこ悪いと思うけど、同じ水泳部女子に負ける水泳部男子は、もっとかっこ悪いだろう。

ガシャン！

音を立てて屋上のフェンスへ飛びつく。

汚いベンチとバスケットゴールがひとつあるだけの屋上は、日差しの強いこの季節になるとひとけがない。じりじりと音が聞こえてきそうなほどの白い光が肌を焼く。

グラウンドやテニスコート、体育館が、小さい。走るやつらは豆粒のようで、転がるボールは遠近感を狂わせる。そして、誰もいないプール。明日から、授業も始まる。

絶対、負けたくない。

天川なんか、負けたくない。

そのときふと、おれはあることを思いついた。

先日、深夜にやってたミニシアター系のロードショー。SFのしょうもない洋画だ。学生が、試合に勝ちたいために宇宙人を味方につける――。

「ボラリス！」

腕を広げて、目を閉じた。

どれくらいそうしていたのか、ただの数秒だったのか。暑さに足元がふらついて、おれは仰向けに倒れた。目を開くと青空が全開で、まぶしい。

「あほくさ」頭がクラクラする。

こんなもんなのだ、どうせ。おれは、こんなもんだ。わけのわからんものにすがるなんて……。

まぶしさから目元をかばうために伸ばした左手の指先に、白い光がチカチカと揺れているのを見つけた。

「ん？」虫かな？と思った。

「待たせたカナ、大洋！」

すると、何かが耳元で囁いてくる。おれはがぼりと起き上がって周囲を見たが、誰もいない。

「ここ、ここ」

左手の光は肌の上をすべるようにして動き、おれの鼻の頭でチカチカとした。

にわかには信じられないことだけれど、どうやらおれは、宇宙人の召還に成功してしまっただけらしい。しかもこいつ、映画と違って、地球人を利用しようという気配が見られない。つまり、バカだ。

「夏休みの自由研究で、地球人の欲望について調べようと思っ  
てナー……」

地球で悩みを抱えている人のところへ行き、その人の願いを叶えて成果をまとめよう、ということらしい。

研究と言いつつもその内容は、叶えられる内容なら叶える、という、曖昧な条件である。おれの場合は、天川より速く泳ぎたいってやつで、それは大丈夫らしい。

「地球を滅亡させるトカ、生命に関わるようなことは、チョッ

ト無理。時空移動トカも」

「まあ、物理的にありえる程度ってことか」

「ソーネ。物理、大事。地球時間で一ヶ月以内でヨロシク」

お願いは一度しかできないと言われては、試すわけにもいかない。こんな状態で、どうして信じられるだろう。病院に行っただろうがいいのではないか、とも、もちろん思った。

けれど。

翌日、おれは驚くことになる。

朝、教室に着くと、みんなが手を見せ合っている。手相でも流行っているのか？ そう思ったけれど、違う。手を差し出しているやつのは、あの、白い光があったのだ。

\*

推測するに、あのととき学校にいて、外にいた全員が、あの白いホシ——宇宙人は自分のことをホシと呼ぶので、おれもそう呼ぶことにする——を持ったようだ。そしてホシを持たないひとは、他人のホシが見えない。先生たちは、外にいたとしてもホシを手に入れてない。……

「若い、大事。若い、欲望、知りタイ」

「あれ全部、おまえなのだよ」

「デス、イエス！」

# おたより

藍間真珠

遠くで遊ぶ少年たちの声がいつの間にか聞こえなくなっていた。何時になつたんだろう？ 固く閉じていた瞼を開けると、ぼやけた視界にかさついた膝が映る。背を丸めていたせいもか、体も強張っている。肩が重い。仕方なくのろのろ顔を上げようとした途端、草の匂いを含んだ風が乱暴に髪を煽った。人気がなくなった公園の隅で、私は膝を抱えたまま小さく体を震わせる。

瞬きをしながら辺りをうかがうと、ほとんど日は沈みかけていた。寒い。昼間はよくてもこんな時間にもなると、やはりそれなりに冷え込む。そこは北国の春だ。セーラー服の袖を指先で掴み、私は首をすくめた。髪が長かった頃ならマフラーの代わりになるんだけど、先日切ってしまったのでそうもいかない。熱を失った土が、太陽を遮ってくれていた木々が、私の体温を奪おうとしている。

「帰ろうかなあ」

そう呟きながら、でも立ち上がることができなかった。ぼんやりしているとすぐに先ほど見た光景が頭をよぎり、胸を鷲掴みされたような感覚に襲われる。強く唇を噛んで私はその痛みをやり過ぎそうとした。どうということはないのだと、傷つくようなことではないのだと、自分に言い聞かせて涙を堪える。口の中にじんわり広がる鉄の味がそれを助けてくれた。

ふられたのだと、誰かにそう言えたら少しは楽になるだろうか。でもそれを口にする資格はなかった。少なくとも私にはそ

う思えた。あまりにも馬鹿馬鹿しい話だから、親にはもちろん言えないし、友だちとの笑い話の種にもできない。耐え切れずにこぼしたむなししい独り言だけが、風に乗って流されていく。

「帰りたくないなあ」

私は相川が好きだった。中学時代は何も思っていなかったはずなのに、いつの間にか好きになっていった。きっかけも覚えていない。気づいたら目で追っていて、くだらない話をするだけで喜べるようになっていた。相川がいるというだけで、どうでもいい行事も楽しかった。でも中途半端な交友だっただけに、何も言わずにここまで来てしまった。卒業する時には告白すべきか、それともそこまで待たずに動くべきか。そんなことをぼんやりと思っているくらいで、好意をほのめかすようなこともしていなかった。友達はいくけどなかなか彼女ができない彼に、安心していたところがあったのかもしれない。今の関係が続くような気がして甘えていたのかもしれない。

「馬鹿よねえ」

私は両腕を抱え、引き攀った笑みを浮かべた。部活が突然なくなつてたまま早く帰ろうとしていなかったら、あんな光景を見なくてすんだかもしれない。そう考えている自分が情けなくて苦しい。こんなところに座り込んでいる自分が弱々しくて嫌いだ。

今日、相川が告白されていた。相手の顔に見覚えはなかった

けど『相川先輩』と呼んでいたから部活の後輩あたりだろう。背が小さくて可愛らしい、素直そうな子だった。ちらりと見ただけでもそう思える愛くるしい顔立ちをしていた。正直、相川にはもったいない。

だから私は彼の返事を聞かなかった。怖くて聞けずにその場を飛び出してきてしまった。気づかれてはいないと思う。唸るような強い風の音が、全てを掻き消してくれたと思う。だけでも問題はそこではない。明日からどんな顔をして彼と話をすればいいのか、私にはわからなかった。

何も知らない振りして、今まで通り挨拶できるだろうか？もし告白の話が出てきても動揺せずにいられるだろうか？返事を聞いておけばよかった。それなら結果がどうであれ、時間さえあれば落ち着くことができたのに。

等間隔に植えられた木を風が揺さぶり、葉のざわめきが公園に満ちる。遊具もない奥まった小さな広場など利用する人はなく、昔はよく子どもたちの隠れ家にも利用されていた。小さな丘がその先に広がっているの、後ろから丸見えてこともない。でも少子化が進んだ今となっては、こんな場所を訪れる人はいなかった。せいぜい遅刻しまいと抜け道の一つとして使う生徒がいるくらいだ。

だから今でも、私は逃げたくなった時にここへとやってくる。泣きたい時、落ち込んだ時、怒りが収まらない時、落ち着くま

での時間をここで過ごす。今日もそうするつもりだった。なのにいつこうに立ち直る気配もなく、日が暮れようとしている。いつになったら成長するんだろう。鼻をすすって私はかぶりを振った。十七歳というのはもっと大人だと思っていたのに、全然子どもの頃と変わらない。手に入れる努力もせずいたものが遠ざかっただけでショックを受けるなんて、どう考えても馬鹿だ。冷たくなった髪が頬へかかるのも気にせず、私はまた膝を抱える。決定的なものは何一つないのに、渦巻く思考は景気並みに沈みゆく一方だ。

途端、木々の葉が一斉にざざめいた。いつそう強い風が吹き、頭へと冷たい何かが落ちてくる。思わず間拔けな悲鳴を上げた私は、飛び跳ねるように立ち上がった。けれども何のことはなく、それはただ水の滴だった。その後も数滴落ちてきて、セーラー服に幾つか染みを作る。今朝のわか雨のせいだろう。まだ残ってるなんて。

無性に腹が立った私は、立ち上がると背後にある木をねめあげた。先ほどまでは日差しを遮ってくれたありがたい存在だったのに、今は迷惑の元凶でしかない。

「ちょっと、びっくりさせないでよね」

私は幹を軽く蹴った。木の枝からどつと水滴が降り落ちてきて、癖のある髪を濡らす。すり減ったローファアの底から鈍い振動を覚えるのも、今は何だか心地よかった。これくらいの痛

みは何だっというのだ。嫌な笑みを浮かべている自覚はあったけど、私はかまわず踵を返した。これ以上ここに居ても駄目だ、落ち着くどころではない。そろそろ夕飯の時間だし、お母さんが心配しないうちに帰った方がいいだろう。部活で疲れたとでも言っておけば、元気がないのはきつとはぐらかせるはずだ。よくそう言ってるし。

所々抉れた地面を踏みしめて、私は大股で歩きだした。すっかり冷たくなっただろう自転車のことを思うと若干気が重い。それでも今朝のようなにわか雨がなければ申しだろうと考えることにして、歩きながら制服についた土を払い落とす。既に地面は乾いていたから、さほど苦労しなくとも砂がばらばらと落ちていく。

「おい、その娘」

そこで、呼び止める声があった。老人のものにも子どもものにも聞こえるような、どこか不安定な声質。それが風音にも負けず、すぐ傍から私の鼓膜を震わせた。目を見開いて慌てて振り返ったんだけど、でもそこには誰もいない。何度も瞬きしてみても、人の姿は見あたらなかった。細い木の陰にも気配はなくて、自然と体が震え出す。——まさか幽霊？ この公園に出るなんて噂は聞いたことないのに。

「どこを見ている、娘」

すると今度は右手から声がした。脈打つ鼓動を意識しながら、

私は怖々とそちらを見る。そこには、確かに何かがあった。誰かではなく何かだった。手のひらくらいの大きさの人の何が、風をもっともせず浮かんでいる。一応、男だろうか。茶色い三角帽子に緑の服らしき物を身につけている。波打つ桃色の髪は小さな背の程まであり、肌は小麦色だった。その背から左右に伸びているのは二対の玉虫色の羽。風に流されそうになるとそれがかすかに縮み、羽ばたき、縮み、微妙なバランスを保っている。この特徴だけなら妖精とでも表現したいところだけど、生憎その顔がそれを許してくれなかった。彼は厳つい老人が苦虫を噛みつぶしたような、そんな表情をしていた。思わず声を失うほどの迫力だ。

「おい、ちゃんと聞いているのか娘？」

その小さい何かは桃色の眉をひそめた。私は一度大きく頷くとぼんやりと周囲を見回す。これは夢だろうか？ もしかして現実ではないのか？ 相川が告白されたのも夢の中の話で、全ては私の不安が生み出した幻なのだろうか？ 確かめるべく頬を叩こうと手を上げると、小さい何かはそれを阻むように咳払いをする。私はもう一度その何かの方を見た。

「私はさわやか公園に住む木の精だ」

余裕と自信を滲ませた名乗り声に、とりあえず私は首を縦に振った。そういえばそんな名前の公園だったなと、記憶の中の看板を思い出す。年季の入った物らしく、錆び付いた上に肝心

人外オチモノアンソロジー「もしそば」 企画サイト

<http://indigo.opal.ne.jp/anthology/>

イベント頒布情報、通販についてはこちらからどうぞ！

人外オチモノアンソロジー「もしそば」ミニ

<http://p.booklog.jp/book/34993>

著者：藍間

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/aima/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/34993>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/34993>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.